

□書 評

「肝 臓」

—構造・機能・病態生理—

改訂第3版

監修 高 橋 忠 雄 東京慈恵会医科大学名誉教授
編集 三 浦 義 彰 千葉大学教授
斎 藤 守 東京大学教授
織 田 敏 次 東京大学教授

大阪大学教授

山 村 雄 一

肝臓の形態と機能、さらに病態に関する近年の進歩を集大成し、そのreference sourceとなる本は長い間わが国での出版が期待されていた。本書の第1版は1964年に世に出され、その期待に応えたと思うが、その後1971年の第2版の出版に際しては「肝臓」と「肝臓病」とが分けて出版されるようになり、今回の第3版では肝臓に関する基礎的な知識を中心として、この10年間ばかりの間に劇的な進歩を示した事項が加えられ、改訂・補筆が行なわれて装いを新たに登場してきたものである。

本書は大きくわけると肝臓の形態と機能、それに病態生理という3つの部分から成っている。形態学的な部分では、肝臓の発生、その比較解剖、肝臓の血管構築、組織学的構造などが前半において述べられ、後半では組織化学、電子顕微鏡的構造に

ついてかなりのページがさかれている。後者では形態と機能との関係が随所において論じられ、肝臓に関する今日的な形態学的アプローチの軌跡をみることができる。

肝臓の機能の部分は本書を大きく特徴づけているといえよう。なかでも「代謝」に重点をおいて詳細に記載されていることは、肝臓に関する古い考え方を改める上できわめて意義深い。

肝臓というと消化器と結びつけて考えるのが昔のならわしであった。しかし肝臓から腸管へ排出される胆汁は消化機能と関係があるにしても、肝臓の最も重要な機能は実に代謝であることを忘れがちであった。

肝臓の機能というとすぐに解毒であるという風に考える傾向もあった。しかし肝臓は細胞内に入ってきた物質に毒性があるか、どうかとい

うようなことは知る由もない。その物質の化学構造に対応して、これを代謝し、結果として解毒という現象がみとめられていたのである。解毒も肝臓の代謝の作用の一部であるといっていよい。

本書のもう1つの特徴は肝臓の病態生理が詳細にかつ最新の知識を加えて書かれていることである。肝炎ウイルスの紹介にはじまって、肝細胞の変性と壊死、再生、肝硬変、肝癌にいたるまで、肝臓にひきおこされる疾病の種々様々の様相が、形態と機能の面から、あるいは生化学、生理学、免疫学の観点から縦横にとらえて解説されている。肝臓の病態生理を横にとらえる総論のようなものや、肝炎に関する記述も欲しいような気がするが、これほど丁寧に文献を集めて今日的な解説を行なった本はわが国では類例をみない。

生化学者は酵素を抽出したり精製したりするとき、その材料として肝臓を使うことが多い。しかし案外肝臓自身の側に立って、その機能を真剣に追求することは少なかった。このことは生化学者に限ったことではない。その意味で本書は、肝臓の形態と機能、その病態生理を肝臓の身になって述べられた書といっていよい。

B 5 / 頁980 / 図457 / 写真206 / 原色図 4
¥33,000 円600 / 医学書院刊

訂正とおわび

4月号476頁の書評「肝臓」の評者名が表紙上で「山本雄一」とありますのは、「山村雄一」の誤りでした。訂正し、おわび申し上げます。 「胃と腸」編集室
